『修文県志』を新たに編纂した修文県地方志弁公室が、王陽明が竜場（現在の修文県）に貶謫された時に関する読み物として作ったもの。竜場に貶謫された時の年譜から始まり、竜場での悟り、辺地での講学した書院や教育について、またそこで書いた文や詩、そこで書いた書法（写真）、建てられた建造物等の遺跡の解説書である。

○楊徳俊　編撰、雷華熙　審校『千古龍岡漫有名－聖地史存』

二〇〇二年九月、清鎮市盤江印刷廠　印刷。A5版、308頁。

前掲書と同じように、竜場における王陽明の詩文の載録と遺跡の解説の後に、後の人の王陽明や竜場に関する詩文が集められている。日本人のものとして、古くは、三島毅（号中洲）の「竜崗観月」の詩があり、他に岡田武彦の「「竜場陽明銅像落成記」「王文成公像贊」「祭陽明王夫子文」「雲貴秀地」「竜場悟道」志賀一朗の「王陽明大徹大悟的〃竜場〃」「竜場」「回顧第二次的故地重游」が収められている。また岡田、志賀、矢崎勝彦氏等の貴州の王陽明国際学術討論会の賀詞や献辞も収めれている。

○朱五義編注『修文陽明洞詩文集注』

一九九九年九月、盤江印刷廠印刷。A5版、172頁。

本書が、前掲の二書のもとになっているようなもので、王陽明の竜場に関する詩文、その後の人の手になる詩文が集められているが、注解がついているところが前掲書と異なる。

○袁仁宗　著『王陽明』

一九九八年七月、貴州民族出版社刊。A5版、437頁。

本書は、歴史長編小説であって、学術・研究書ではないが、王陽明の伝記長編小説が出ているのであげておきたい。

＊次のものは、単行本でなく、学術誌（紀要）掲載のものであるが、陽明学研究の基本資料として紹介をしておきたい。

○水野　実・永冨青地　著『陽明先生遺言録』（一）～（五）

（『防衛大学校紀要』第70輯～第74輯（平成七～九年）

佐藤一斎が『伝習録欄外書』で指摘していた『陽明先生遺録』を、都立中央図書館の「河田文庫」にある一斎本を底本として、東北大学所蔵の「狩野文庫本」と「全書本伝習録」、等との異同を明らかにして、訓読注釈をして、研究に資するよう公刊したものである。これを完成したあと、研究者の要望に答えて、さらに現代語訳（現代語訳『陽明先生遺言録』（一）（二）、『防衛大学校紀要』（84）（86）、前者の（一）～（三）の部分）も進められている。なお前者においては、（二）からは三沢三知夫氏が参加している。

○水野　実・永冨青地　著「『陽明兵筴』の基礎的研究」

（『人文社会科学研究』第41号～第45号、（平成13年～17年）

本書『陽明兵筴』の訓読と注釈がなされている。

○鄭仁在・黄俊傑編『韓国江華陽明学研究論集』

二〇〇五年九月、国立台湾大学出版中心刊。A5版、562頁。

―東亜文明研究叢書（50）―

本書は二〇〇四年一〇月一五日―一六日に行われた「江華陽明学派的定位与現代的意義」をテーマとする国際学術研討会において発

表した論文を収めたものである。台湾大学東亜文明研究センターの黄俊傑教授の序。韓国陽明学会会長　西江大学教授鄭仁在氏の導論のあとに十七篇の論文と三つの附録よりなる。

内容は次の通り。

宋錫準「韓国陽明学的形成和霞谷鄭齊斗」
李慶龍「十七世紀後陽明学時期和霞谷学的定位」
呉　震「鄭齊斗思想緒論」
劉哲浩「鄭齊斗的心即理説」
鄭仁在「鄭齋斗的良知説」
崔一凡「鄭齊斗工夫論研究」
南相鎬「鄭齊斗的中極論」
楊祖漢「鄭齊斗対王陽明哲学的理解」
李相虎「鄭齊斗的陽明右派哲学」
黄俊傑「従東亜儒学視域論鄭齊斗対孟子「知言養気」説的解釈」
朴連沫「鄭齊斗的道徳哲学」
安英吉「鄭齊斗的隠居邏輯与漢詩」
崔在穆「鄭齊斗陽明学在東亜学術中的意義」
中純夫「陽明学対初期江華学派的影響
　　―以鄭齊斗、李匡臣及沈錆為中心」
沈慶昊「江華学派的偽学批判」
宋河環「李匡師的美学思想」
金容載「韓国陽明学研究現況与新探索―以江華学研究為中心」

鄭仁在氏は、導論の中で、陽明学が韓国にもたらされ、最初の陽明学者である南彦経から、鄭齊斗（霞谷）、その門下の江華学派の二〇人について、そして一九九五年四月八日に創立された韓国陽明学会について述べられ、本書の十七の論文のコメントをしている。

＊本書に論文を寄せている中純夫氏に、朝鮮陽明学研究史の論文があるので氏の研究を紹介しておきたい。

中純夫著「朝鮮陽明学研究史に関する覚え書き」（京都府立大学学術報告』第57号平成17（２００５）年12月。ｐ.１３９―１７９.

この報告は、これまでひ公にされた韓国の陽明学研究である十八の著書また論文の紹介と解説である。

最も古い朝鮮陽明学を取り扱った研究は、鄭寅普の『陽明学演論』であり、一九三三年、『東亜日報』に、六十六回ににわたって連載されたもので、最初の本格的研究書であり、一九七二年に単行本として刊行された由。ハングルの読めないものにとっては、この解説は有り難い。次に取り上げられている李能和の「朝鮮儒学界之陽明学派」（１９３６年『青丘学叢』第25号）は、漢文で書かれたもので、日本人の研究家（高橋亨や阿部吉雄）の研究の基盤をなしている。高橋亨「朝鮮の陽明学派」（『朝鮮学報』第４輯、１９５３年）が日本人の最初のもの。最近のものから上げると、『陽明学』（第12号）に「韓国陽明学関連論著目録」を訳出した林蘊圭に「朝鮮の陽明学史に関する研究」（『訪日学術研究者論文集―歴史―』第４巻、２００１年）がある。なおこの論文の筆者中純夫氏の自著「霞谷鄭齊斗緒論―朝鮮儒林における陽明学受容―」「恒斎李匡臣緒論―初期江華学派における陽明学受容―」「樗村沈錆緒論―初期江華学派における霞谷学受容―」「白下尹淳緒論―初期江華学派の研究―」の四篇も紹介している。

（疋田啓佑）